

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役会長 稲垣良次

2025. 8
No.384

「発信型三方よし」

「三方よし」とは、近江商人の経営哲学の一つで、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方すべてが満足する状態を指します。これは、単に売り手と買い手の利益を追求するだけでなく、社会全体にも貢献できるような商売こそが良い商売であるという考え方です。

(A I による概要)

「陰徳の美」

「陰徳の美」とは、人知れず良い行いをすること、またはそのような行いを通じて

得られる内面的な美しきことです。江戸時代の粋な文化に由来し、人目に触れない所に美を追求する考え方を指します。

(A I による概要)

今は、世代の違いで「分かる人には分かる」といった空気を読むような方法は通用しない。ましてやグローバルには通用しない。何より、発信しないと相手に気づきを与えられず、イノベーションにつながらないことが課題なのである。そこで、三方よしを補正して、「発信性」を加えるべきと考え、筆者は、世界標準でのSDGs活用の「発信型三方よし」を提唱してきた。

(『月刊三方よし経営』25年7月号)より)

イナテックには、このような「陰徳の美」という考え方が今も存在しています。ややもすると、ちよつとしたコミュニケーション不足が原

因で、お互いが善意で行ったことにも気づかず誤解を生んでしまい、それがトラブルにつながることも少なくないかもしれません。

「陰徳の美」は日本の素晴らしい「徳」の一つです。しかし、DXや生成AIが急速に発達、発展する現代では、自らの行いを発信することを忘れてはいけないと痛感しています。

気をつけなければならないのは、「フェイクニュース」や匿名で無責任な情報が飛び交うSNS等に安易に反応しないことです。情報の真偽を判断できる能力と、その判断をするための正確な情報を持つことが大変重要だと考えております。

イナテックグループも、『発信型陰徳の美』を励行し、風通しの良い職場づくりに取り組んでください。

宜しく申し上げます。

高校時代

軟式テニスからの衝撃とサッカーへの決意

中学までは、テニスといえば軟式が当たり前で、世界中でこのテニス(軟式)が行われているとばかり思っていました。ところが、何かの情報で「軟式テニス」が日本とアジアの一部でしか通用しないと知り、愕然とした時がありました。

その時、「よし、高校に入ったら国際的に通用するサッカーをしよう」と心に決めました。私の母校である一色高校には、当時グラウンドが2面あり、サッカーゴールも設置されていました。

ところが、いざ入学してみると肝心のサッカー部がありませんでした。サッカーを目指していただけに、これにはショックを受けました。

入学して間もない頃、突然見知らぬ上級生が教室に入ってきて教卓に立ち、『稲垣良次はいるか!』と大声で私の名前を呼びまし

た。そして私は無理やり軟式テニス部に入部することになったのです。その先輩は竹内さんという方で、後輩思いの非常に優しい方でした。

私が入部するやいなや、先輩たちは「一色高校のコートは水はけが非常に悪い。だから耕して土の入替をするんだ」と、どえらい(とんでもない)ことを言い出しました。そして一年生のうち半年間は、土起こしに明け暮れることになってしまいました。

サッカー部を目指していたのに、まさかテニスコートづくりをするとは思わず、呆然としました。しかし、運がいいのか悪いのか、その経験が結果的にチームづくりにはとても良かったのです。おかげで西三河大会まで進むことができた、一応は格好がつかえました。

物分りの良い父、邦松の寛大さ

16才になり、『原付免許』がとれる年齢になった私は、早速免許を取り、学校に内緒でスーパーカブを買ってもらいました。しかし納

車当日、下りカーブを曲がり切れず田んぼに突っ込んでしまい、買ってもらったばかりの中古のスーパーカブは廃車になりました。その事故で顔面を強打したのか、前歯2本の神経がだめになってしまいました。結局その2本を抜くことになり、今もブリッジで、この歯とは一生の付き合いになりました。

それでも懲りなかった私は、バイク好きな住み込みの工員さんが当時乗っていた「ホンダCB750(ナナハン)」のカッコよさに惹かれ、大型バイクの免許が欲しいと思うようになりました。そして、3回も失敗しながら何とか免許を取得しました。

高校受験や期末テストの勉強にこのくらいの熱意で取り組んでいたなら、もっと良い学校へ進学できたのではないかと考える次第です。何分、やはり勉強が好きでなかった証拠なにかんであると痛感しております。

バイクのことについては、父(邦松氏)自身も好きな方なので認めてくれていました。父も創業当初はホンダドリーム号にリヤカーを

取り付け、機械の買い付けや納品をしていた
そうです。まさに、ホンダドリーム号が創業
の原点でした。

その単車に息子である私が挑戦すること
が、父は嬉しかったのかもしれない。いや、
もしかしたら「親バカ」そのものだったよう
にも思います。

そのこともあつて、「ナナン」はムリでも
SL350なら、とダメ元で親父に頼ん
でみたら、なんとすぐに買ってくれたのです。
私は調子に乗って、よせばいいのに、遅刻寸前
になるとそのSL350にのって通学す
るようになりました。もちろん、それは校則
違反でした。

よりにもよって、50ccのバイクに乗っていた
先生を追い越してしまいました。もちろん結
果は『保護者召喚』でした。自宅謹慎処分と
なり、親父も当時の校長であつた山口先生に
平謝りかと思いきや、なんとその場で意気投
合し、稲垣鉄工所への生徒の就職斡旋の話
をしていたようです。

やはり父も、「転んでもタダでは起きない」
逞しさがあつたのだと思います。そんな出来
事も、私にとっては(勝手ながら)後継者とし
ての勉強だったのかもしれない。

勉強よりもお祭りやパチンコなど…。『当
時だから許される』本当にムチャクチャな高
校時代でした。

菜根譚後集

一一五

千金難結一時之歡、一飯竟致終身之感。蓋愛重反爲仇、薄極翻成喜也。

大金を与えても、その場かぎりの喜びも得られないこともあり、(反対に)、ほんのわずかな恵
みも、案外、一生の恩を感じることもある。思うに、愛情も重すぎると、かえって仇となること
があり、それがきわめて薄くても、かえって時には喜ばれることもあるものである。

